様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２７０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１８３

研究課題名（和文）日本の現代音楽形成におけるH.カウエルとの相互受容

研究課題名（英文）The Reciprocal Relationship between the Music of Henry Cowell and Japanese Culture

研究代表者
大竹　紀子（Ohtake, Noriko）

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：５０５１３１４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカ前衛音楽のパイオニアである作曲家ヘンリー・カウエルは日本文化から大きく影響を受けている。本研究ではカウエルと日本の関わりについて解明するため、カウエル資料を所蔵するニューヨーク公立図書館とワシントン米議会図書館を中心に調査を行った。その成果は国内外の学会および総括的な実技演奏会において発表した。「カウエルが出会った日本そしてカウエルが日本にもたらしたもの」をテーマに現代音楽の潮流に新たな視点を加えることができた。

研究成果の概要（英文）：A pioneer of American avant-garde music, composer Henry Cowell was deeply influenced by Japanese culture. In this project, the researcher aimed to explore the relationship between Cowell and Japan through investigating the Cowell collections at New York Public Library and the Library of Congress in Washington, D.C. The outcome was presented at Japanese and international conferences and finally at a live concert. The theme of the project "Japan that Cowell saw and what Cowell brought to Japan" added a new perspective and a significant contribution in understanding of the 20th century musical exchanges.

研究分野：現代音楽、ピアノ演奏

キーワード：ヘンリー・カウエル　アメリカ前衛音楽　カウエルと日本　日系人アーティスト　邦楽器と現代音楽　カウエル・コレクション

１．研究開始当初の背景

(1) 米国の作曲家ヘンリー・カウエル（1897-1965）は主にトーン・クラスターと内部奏法という実験的ピアノ奏法の創始者として知られている。カウエルの弟子ジョン・ケージと東洋思想の関わりについては広く認知されているが、カウエルが日本など東洋の文化と深く関わりがあったことについて掘り下げた研究は少ない。カウエルは音楽の世界的な多様性を重要視した最初期の米国人作曲家であり、その音楽に日本文化の影響が見られるという事実は、カウエルの言う「音楽の全体世界」の一潮流を体現していると捉えられ、日本文化と米国前衛音楽の繋がりについて探求する上でも意義深いと思われる。

(2) 本研究者は本研究課題に取り組む前にすでにカウエルのピアノ作品の演奏、楽譜出版、論文発表、学会発表などで成果をあげており、カウエル研究に対する素地があった。カウエルと日本というテーマに含まれる「箏コンチェルト」や「富士山の白雪」の演奏も行っていた。本研究課題はそこまでの実績の延長線上にあると同時に、米国で音楽の教育を受け、現代音楽を中心に演奏を行ってきた本研究者の独自性を国際的にも発揮できるものと想定された。

２．研究の目的

(1) カウエルは米国前衛音楽のパイオニアの一人であり、その音楽は日本をはじめとする東洋文化から大きく影響を受けている。同時に、カウエルの前衛思想は、戦後の日本の現代音楽創造に多大なインパクトを与えた。一つの文化の音楽は単独で存在するものではなく、そこに流れ込む影響も一方向ではない。本研究者はカウエル作品の研究を進めるなかで、“カウエルが出会った日本そしてカウエルが日本にもたらしたもの”というテーマから、20 世紀の音楽文化交流と日本音楽の理解へ向けて貢献できるのではないかと考えた。本研究課題では、日本の現代音楽とカウエルが相互に受容し、培った音楽形成について探求することを目指した。

(2) カウエルと日本の関わりについては以下のカテゴリーに分けることができる。

① カリフォルニアで出会った日本：幼少期に触れた日本文化、青年期に出会った日本人
② 日本的作品：日本をイメージした作品と日本の楽器を用いた作品
③ ワールド・ミュージック
④ 戦中、戦後の日本との関わり
⑤ ケージそして日本への影響

本研究課題では上記の中から主に①と②に主眼を置き、資料調査および各種発表（実技発表を含む）を通してカウエル音楽を検証することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 文献・楽譜・音源収集

数多く存在するカウエル関連の文献、楽譜、音源資料の調査、検証が重要な出発点であった。本研究課題申請時に明らかであったカウエル自身による著作物は 237 点、カウエルについて書かれた文献は約 1400 点、うち主要な単行本 137 点であった。カウエルの音楽作品はリヒテンワンガーによるカタログでは 966 曲（後に追加があり 970 曲）となっており、市販されている楽譜はペータース社などが出版しているが、絶版、未出版のものも多い。音源資料では市販の CD が当初約 30 種類認められた。これらを精査、本課題に適合するものを選択し、購入、入手することを目標とした。

(2) 資料調査

カウエルの資料は主に以下の図書館に所蔵があるのが判明していた。

① ニューヨーク公立図書館
② ワシントン米議会図書館
③ スタンフォード大学図書館

上記のうち①はカウエル未亡人が寄贈したコレクションであり最も規模が大きい（203 ボックス）。その内容は作品関連、書簡、プログラム、公的文書、写真など多岐に渡る。②は主に自筆譜に関する調査先となる。③はコレクションとしては大きくないが、カウエルの生地に近く、幼少～青年期の大学との関わりも検討事項とした。①～③への調査のため数回の渡米が予想された。申請時には他にイエール大学図書館、コロンビア大学なども調査対象候補としていたが、本研究課題に対してさほど重要性が認められず課題実施中に調査対象から省いた。

インタビュー調査として「箏コンチェルト」を初演した唯是震一氏（2013 年に執り行い済み）、2012 年にカウエルの伝記を出版したジュリアード音楽院のジョエル・サックス氏などが考えられた。加えて、カウエルの最初期作品「創造の夜明け」を委嘱した菅野衣川、カウエルに尺八を教えた玉田喜太郎ら在米日系人アーティストについての調査が必須であった。

(3) 発表

本研究課題の国際的意義を考えると研究成果を海外でアピールすることも重要とみなした。課題実施期間中に開催された国際音楽教育学会および大学音楽学会の国際大会を発表先として予定した。さらに、ピアノ演奏を専門とする本研究者の研究を特徴づけ、芸術表現をキーワードとした本課題の意義を高めるために、最終年度に実技発表（演奏会）を計画した。実践的探求を通してのみ得られる音楽の本質があり、また邦楽器演奏家に依頼することにより日本の伝統音楽界への新しい情報提供となると考えた。一般聴衆がカウエル音楽に対する理解を深めるため

にも必要不可欠であった。

４．研究成果

(1) 文献・楽譜・音源収集

主要な文献はほとんど入手することができた。文献では特にカウエルの著書である『ニュー・ミュージカル・リソース』、『チャールス・アイヴスと音楽』、『アメリカン・コンポーザース・オン・アメリカン・ミュージック』などが重要であった。他にワイスガル、シェパードによる論文、日系アメリカ人に関する文献も入手できた。特に菅野衣川について研究を行っている篠田左多江氏の論文は大きな情報源であった。リヒテンワンガーによるカタログ『ザ・ミュージック・オブ・ヘンリー・カウエル：記述目録』は手に入らなかった。国内の図書館で所蔵しているところがあり、現在ではWeb上で公開もされていることから、リサーチに関して問題はなかった。

楽譜ではペータース社出版のもの、アソシエーテッド・ミュージック・プレス社出版のものでオンデマンドによる入手可能なものはすべて購入した。本研究課題に直接的に関係のある「箏コンチェルト第 2 番」「ハーモニカ・コンチェルト」の楽譜は重要であった。さらにカウエルのワールド・ミュージックとの関わりにおいて主要資料となりえる「イランへのオマージュ」「マドラス交響曲」「ペルシア・セット」「ユナイテッド・カルテット」や、カウエル独自の作曲理論を展開した「パーカッション・コンチェルト」「26 の同時モザイク」「セット・オブ・ファイヴ」「アンティフォニー」「リズム・ハーモニー・カルテット」「シンクロニー」は、カウエル音楽理解および今後の展開へも重要な資料となりえる。

音源収集では市販のCDを27種そろえることができた。中でも雅楽の響きからインスピレーションを得た「オンガク」の初演時の録音や、カウエル自身が解説、演奏しているピアノ作品の録音など貴重なものを入手することができた。

(2) 資料調査

① ニューヨーク公立図書館

世界最大のカウエル・コレクションを所蔵するニューヨーク公立図書館（リンカーンセンター館）における資料調査は本研究課題の中で最重要の位置付けとなる。カウエル・コレクションは 18 シリーズ 203 ボックスという膨大な量から成る。課題期間中に 3 回調査を行うことができた。

第１回目の調査（2014 年 9 月）においてはまず作品関連の資料を調査した。自筆譜の一部、初版の楽譜、直筆の解説、未出版の楽譜などを閲覧することができた。ここで最も重要だったのが尺八のための「ユニヴァーサル・フルート」の楽譜（自筆譜）のデータを入手できたことである。他に「箏コンチェルト第１番」の自筆譜、カデンツァの楽譜（衛藤公雄の手によるものと思われる）も入手できた。ワールド・アンド・フォーク・ミュージックのシリーズでは、玉田喜太郎関連のプログラム、日本音楽に関する資料を多数閲覧した。さらにオーガニゼーションのシリーズでは、来日した際の多くの資料、イースト・ウェスト・ミュージック・エンカウンター関連の資料および発表原稿、来日を支援したロックフェラー財団へのレポートなどを閲覧した。唯是震一の結婚式の様子がわかる資料など個人的な関係を伺わせるものも含め、カウエルと日本の関わりについてかなりの量を調査することができたが、時間の制約からすべてを網羅することはできなかった。この渡米の際、カウエル研究家のジュリアード音楽院教授ジョエル・サックス氏と面会し、インタビューを行った。伝記について全般的な情報、本研究課題のための調査箇所などについて貴重な情報を得ることができた。

第 2 回目の調査(2015 年 9 月)においては、まず書簡類を調査した。ここでは衛藤公雄、玉田喜太郎、唯是震一など日本人関係のものに絞った。次に教育関連の資料を調査し、カウエルがコロンビア大学、ニュースクール、個人授業などで教えた際の資料を閲覧した。日本やワールド・ミュージックに対する造詣の深さを伺い知ることができた。さらに大量の写真類を調査し、幼少期、青年期、特殊奏法の演奏風景、日本の楽器を演奏している様子、来日の際の様子、日本人アーティストとの撮影など多くの貴重な視覚資料を閲覧できた。日本人との写真が驚くほど多くを占めていた。他に母親のクラリッサが書いたカウエルの成長記録、名刺類なども閲覧した。書簡類は 30 ボックスから成り、本調査では日本人関連のファイルのみ閲覧したが、今後すべてのファイルを調査する機会を設けたい。

第 3 回目の調査（2017 年 3 月）ではニューヨーク公立図書館内の録音記録資料保管所所蔵のカウエル関連の音源を視聴した。カウエルが曲を書いた東京都の小学生による演奏、「箏コンチェルト第１番」「箏コンチェルト第 2 番」の初演演奏、カウエルが授業等で使用していたと思われる日本音楽の録音などを聴くことができた。さらに「ハウ・ア・コンポーザー・ワークス」「ハウ・アンド・ホワイ・ア・コンポーザー・クリエイツ」と題した講演をカウエルの肉声で聴くことができた。

ニューヨーク公立図書館で入手した資料は多くをスマートフォンの写真データとして保存している。写真データの公開には本コレクションを管理しているザ・ディヴィッド・アンド・シルヴィア・タイテルバウム財団の許可が必要であり、この財団とは数回のやりとりを通して、本研究に関する理解を得ている。

② ワシントン米議会図書館

米議会図書館はカウエル作品の自筆譜の

ほとんどを所蔵しており（「ユニヴァーサル・フルート」などは除く）、出版されていない作品の閲覧、出版されている作品の自筆譜の検証の点において非常に重要である。2015 年 2～3 月の調査では、本研究の主題である「カウエルと日本」に関係する作品の中でも、日本人詩人菅野衣川の委嘱で作曲された最初期の「創造の夜明け」の楽譜を閲覧できたのが最も大きな成果であった。「創造の夜明け」の自筆譜は図書館のカタログ整理の方法により、ひとまとめになっておらず多少の苦労はあったが、最終的に曲全体のデータを入手できた。他にカウエルが日本滞在時に作曲した「千寿第二小学校とカスコの歌」、箏のための「ファミリー・ロンド」も入手できた。さらには、カウエルが最初にトーン・クラスターを使用した「和声の冒険」、最初期に内部奏法を使用した「忘却の剣」、有名な「マノノーンの潮流」作曲のきっかけとなった「バンバの建立」、様々な人種の特徴を音楽で描いた「アメリカン・メルティングポット」「キャラクターズ」、妻のシドニーのコレクションからはカウエルが書いた「ピアノ・インストラクション・コース」の原稿など、貴重な資料を手に入れることができた。本図書館は資料のコピーおよびデータ保存のシステムが比較的扱いやすくなっており、必要な資料はすべて入手できた

③ スタンフォード大学図書館／サンフランシスコおよびメンロパーク

カウエル・コレクションを所蔵するスタンフォード大学図書館における資料調査、カウエルが当時の日系人アーティストと関わりを持ったサンフランシスコ居住地、日系アメリカ人歴史協会、カウエルが生まれ育ったメンロパークの実地調査を執り行った。

スタンフォード大学図書館ではカウエル・コレクションにおいて、写真、各種記事、原稿資料などを閲覧した。さらにカウエルと関係の深かったジョン・ヴァリアン関連のコレクションも確認できた。

カウエルが生まれ育ったサンフランシスコ周辺の土地風土そのものを感じ取ることも主眼に置いており、生家があったメンロパークおよび幼少期にアジア人移民と交流を持った市内の地域を実地調査できたことは、本研究者にとって非常に意義深かった。さらに当時の日系人居留区の地理／歴史的な変容の概要をカウエルの成育時に合わせて把握することができた。

(3) 発表

① 論文発表

「ヘンリー・カウエルの箏コンチェルト第 2 番創出の経緯」と題する論文において、カウエルと箏奏者、唯是震一との交流の様子、そこから本作が生まれた経緯、作品の分析、考察を行った。唯是へのインタビューおよび第 1 回目のニューヨーク公立図書館での調査内容を活かすことができた。

② 学会発表

2015 年 6 月にフィンランドで開催された大学音楽学会の国際大会において「カウエルのトーン・クラスター作品における日本の要素」と題した演奏を含む研究発表（発表審査有）を行った。発表の概要は、カウエル音楽における日本の要素の重要性、作品演奏「好ましい会話」、日本の旋法の使用、“ ジャポニズム ”との相違点、カウエルの幼少期の体験、最初期のトーン・クラスター作品演奏「和声の冒険」、日本人詩人、菅野衣川との出会いについてと「創造の夜明け」一部演奏、ピアノ作品以外の “ 日本的 ” 作品について、作品演奏「富士山の白雪」、日本の旋法の使用、雅楽の影響についてである。欧米ではあまり知られていないカウエルの新しい側面を紹介することができた。出版されていない「和声の冒険」と「創造の夜明け」の演奏は米議会図書館における自筆譜調査の成果であり、中でも（確認できていないが）「創造の夜明け」の演奏はほぼ世界初演だったのではないかと思われる。

2016 年 6 月には日本音楽表現学会の大会において「ヘンリー・カウエルと日本の関係性」と題する演奏を含む研究発表を行った。発表の概要は、カリフォルニアにおける幼少時の体験、菅野衣川との出会い、「創造の夜明け」の演奏、玉田喜太郎との出会いと「ユニヴァーサル・フルート」について、2 つの箏コンチェルトについて、雅楽と笙について、カウエルの日本での講演内容について、「富士山の白雪」の演奏である。ニューヨーク公立図書館およびサンフランシスコでの調査から得た一次資料を活用し、日本とカウエルの関係性について多角的にまとめることができた。

2016 年 7 月には英国で開催された国際音楽教育学会の大会において「ヘンリー・カウエルをアメリカ前衛音楽のパイオニアとならしめた多文化的で特異な教育的背景」と題したポスター発表を行った。内容を生誕、アジア人の友人、トヨン・クラブ（子ども時代に仲間と作った創作グループ）、ノー・スクール、ホーム・スクーリング、IQ 少年の項目に分け、特にサンフランシスコ時代の日系人を含む東洋系の友人たちとの交流、学校で教育を受けなかった特殊な教育環境、スタンフォード大学ターマン教授の IQ 実験の対象であったことなどについてまとめた。幼いころから日本人らと関わったカウエルの多文化性と特異な教育的背景が後の前衛的創作に影響を与えたのではないかとする考察を行った。

③ 実技発表（演奏会）

本研究課題の集大成として、2016 年 11 月に東京オペラシティにおいて「ヘンリー・カウエルが出会った日本」と題した演奏会を行った。明治時代に渡米した日系人詩人菅野衣

川が委嘱した最初期のピアノ作品「創造の夜明け」はワシントン米議会図書館で自筆譜を入手した成果であり、菅野が若いカウエルの才能を見抜いた重要な存在であることの証明ともなった。演奏会では菅野の英語詩を日本語に訳したものを読みながら演奏した。日本のイメージを描いたピアノ曲「富士山の白雪」はクラスターを使用することによって雅楽のサウンドコンセプトに近づけたものと考えられる。ハーモニカ奏者和谷泰扶と共演した「ハーモニカ・コンチェルト」はハーモニカで雅楽の笙の響きを再現したもので、同じく雅楽の響きからインスピレーションを得た「オンガク」と並び、カウエルが雅楽に一種の理想を見ていたことが分かる作品である。ハーモニカ奏者にとっては技巧的な面から新しい境地を開拓した作品になっている。オーケストラ・パートは菅野由弘がピアノ用に編曲した。尺八奏者藤原道山が演奏した「ユニヴァーサル・フルート」は西洋人が書いた初の尺八作品である。自筆譜をニューヨーク公立図書館で入手した成果ともなる。カウエルは大正時代に渡米した日系人尺八奏者玉田喜太郎から尺八を学び、この作品も玉田のために書いている。藤原によれば作品からカウエルが伝統的奏法に精通していたことがうかがえるとのことである。なお演奏会当日には玉田の甥と玉田の尺八の師神如道の娘が聴衆に加わった。箏奏者後藤幹子と共演した「箏コンチェルト第２番」は東京芸術大学卒業後ニューヨークに留学し、カウエルと深く親交のあった箏奏者唯是震一のために書かれた。作品の詳細については大竹（2014）にまとめてある。オーケストラ・パートは菅野由弘がピアノ用に編曲した。

演奏会ではすべての作品について口頭による解説を交えながら演奏した。広報のため制作したチラシおよび演奏会場で配付したプログラムにはタイテルバウム財団から使用許可を得たニューヨーク公立図書館所蔵の写真、各曲の詳細な解説、本研究課題のコンセプト、科研費への謝辞を載せた。当日は満席となり会場外で聴く聴衆も出た。「カウエルが出会った日本」をテーマに、“日本”が存在するカウエル音楽を提示しその意義を検証することができた。

(4) 研究成果のまとめと今後の展望

研究課題期間全体を通して、研究目的にあげた「カウエルがカリフォルニアで出会った日本」および「日本的作品」についてはほぼ全体像を解明することができた。アメリカ前衛音楽における日本文化の重要性とその一潮流を探求することに本研究の意義があり、20 世紀の日本音楽について考察する上でも新しい視野を加えることができた。芸術音楽の分野では日本が西洋から影響を受けるという観点が強調されてきたが、文化交流は一方向ではなく、常に相互的な流れがあるということに一つの視点を与えることができたのではないだろうか。

カウエルと日本の関係性については、カウエル音楽の主要な要素であるワールド・ミュージックの一端としての日本音楽、戦中、戦後の日本との関わりなどについて、今後も研究を進めていきたい。また教育的見地から、カウエルの多文化性とそこから生まれた前衛性というテーマ、「音楽づくり」に見られる前衛音楽およびカウエル音楽との関連、カウエルの特異な教育的背景とその事情、カウエルの手によるピアノ指導書などについても研究していきたい。

言うまでもなくカウエル音楽は“日本”以外の多くの要素でできている。カウエルの本当の全体像を知るという意味では、まだ初段階にあると言ってもいいだろう。また本テーマにより他文化に対する日本の優位性を叫ぶつもりは毛頭ない。それどころかカウエル音楽を通して見え始めたものは、他文化への寛容、理解、受容がもたらす自由な精神と解放である。カウエルが示唆する実験的な音楽の存在意義、演奏家の存在意義、研究者の存在意義を確認するためにも、その中に本研究者が属する“日本”が居る幸運を享受し、さらなる探求に努めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 大竹　紀子、ヘンリー・カウエルの箏コンチェルト第２番創出の経緯、相模女子大学紀要、査読無、Vol.78、2014、1-12
http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009899863.pdf?id=ART0010430625

〔学会発表〕（計３件）

① 大竹　紀子、Multicultural and Unique Educational Upbringing that Made Henry Cowell a Pioneer of American Avant-Garde、International Society for Music Education、2016 年 7 月 25 日、グラスゴー（英国）

② 大竹　紀子、ヘンリー・カウエルと日本の関係性、日本音楽表現学会、2016 年 6 月 5 日、拓殖大学北海道短期大学（北海道・旭川市）

③ 大竹　紀子、Japanese Elements in Henry Cowell’s Tone-Cluster Works、College Music Society International Conference、2015 年 6 月 23 日、ヘルシンキ（フィンランド）

〔その他〕

① 実技発表（演奏会）：大竹　紀子、後藤　幹子、藤原　道山、和谷　泰扶、大竹紀子企画コンサート「ヘンリー・カウエルが出会った日本」、2016 年 11 月 20 日、東京オペラシティ・リサイタルホール（東京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
大竹　紀子　（OHTAKE, Noriko）
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：５０５１３１４９